

氏名（本籍）	金城 智子（福岡県）
学位の種類	博士（政治学）
学位記番号	甲第 48 号
学位授与年月日	平成 27 年 3 月 31 日
学位授与の要件	久留米大学大学院学則第 14 条第 1 項第 2 号による
学位論文題目	黒人自治体建設運動とタルサ人種暴動 —オクラホマ黒人のアイデンティティを賭けた闘争—
論文審査委員会	主査 教授 石川 捷治 副査 教授 荒井 功 副査 教授 児玉 昌己

論文内容の要旨・要約

本論文は、アメリカ政治社会史のなかで、19世紀後半から1920年代のオクラホマ（Oklahoma）で、構造的・組織的な差別・排斥・暴力に直面した黒人たちの歴史と状況を明らかにしたものである。彼らのアメリカ人としてのアイデンティティを確立、確保するための闘いを、黒人自治体建設運動（Black Town Movement）とタルサ人種運動（Tulsa Race Riot of 1921）における抵抗・反撃という研究テーマに設定し、検証した。黒人自治体建設は、自律したコミュニティを形成することで人種の向上を目指した、「アメリカ社会の一員になる」ための運動であったと分析した。他方、タルサ人種暴動での白人群衆の暴力に対する黒人の抵抗・反撃は、自身、家族、コミュニティを守るためだけでなく、「アメリカ人であることを賭けた、アメリカ人であることを死守する」闘いでもあったことを実証的に明らかにした。

本論文は、序章と終章を含めて6章で構成されている。

第1章では、20世紀初頭にかけての西漸（The Westward Migration）によって黒人人口が増加したオクラホマで黒人州が議論され、アメリカ国内最多数（最多時で約50）の黒人自治体が建設された過程を追っている。黒人自治体建設の背景には、南部の差別・貧困・暴力からの逃避に加え、経済的・政治的自立を達成した上で、人種のプライドを回復させ、黒人もアメリカ人であることを証明するという切実な欲求の存在を指摘した。これらを考察するなかで、彼らの自治と自立を勝ち取るための闘争の実態に迫っている。

第2章では、南部の人種主義がオクラホマに迫り、オクラホマを脱出する黒人が徐々に増加する過程と、1910年代にオクラホマで盛り上がったアフリカ帰還運動（Back-to-Africa Movement）について論じ、オクラホマでこの時期にアフリカ移住が一定の支持を得た要因について明らかにした。

第3章では、近郊の石油の発見により、一夜にして輝ける新興都市に変身したタルサの始まりから論じる。本論文では、黒人たちの新たな「約束の地」(Promised Land)となり、各地から黒人移住者を迎えたタルサのグリーンウッド(Greenwood)地区を黒人自治体の一環として位置づけた。グリーンウッドの黒人ビジネスは町に活気をもたらした一方、タルサ市はグリーンウッドの整備や治安維持を怠り続けた。そのためグリーンウッドは「犯罪天国」と呼ばれ、銃と暴力がはびこる社会として名を轟かせることとなった。警察をあてにできなかった黒人たちが自衛のため武装し始める経緯を考察した。

第4章では、推定死者数300人以上の甚大な被害をもたらした、アメリカ史上最悪と称されるタルサ人種暴動の経緯を、住民らの証言を交えながらドキュメントしている。築き上げたコミュニティを破壊される危機に瀕し、黒人住民たちは団結し決死の覚悟で抵抗・反撃する。コミュニティとプライドを死守するために闘ったタルサの黒人たちの底流には、闘う精神が脈々と流れていた。しかし、白人住民に数で圧倒され、グリーンウッドは焼け落ち、ブラックウォールストリート(Black Wall Street¹)としてアメリカ中の黒人の希望の象徴として崇められたコミュニティは、その日常と共に姿を消すこととなった事態を詳しく論述する

第5章では、黒人住民の強制収容、人的・物的被害の甚大さなど、暴動後のタルサのあらましを論じ、タルサ人種暴動がどのように報道されたかを検証する。タルサでは暴動は「黒人の反乱」という枠組みで捉えられ、この枠組みは、2001年にタルサ人種暴動検証委員会(the Oklahoma Commission to Study the Tulsa Race Riot of 1921)による最終報告書が発表され、黒人は暴動の原因ではなく、被害者であったとようやく公式に転換されるまで継続したのである。

第6章では、暴動の要因を近因と遠因に大別した上で、次のように分類した

- ①地域的要因・・・タルサの人口増加と特徴的な人口構成、黒人に対する犯罪を取り締まらない法執行機関など
- ②歴史的要因・・・第1次世界大戦をきっかけにした黒人の戦闘性の発露、1919年の人種暴動の多発、リンチや自警団精神
- ③社会的要因・・・メディアの報道、人種間の分断など

終章では、暴動が次第にタブー視され、白人・黒人双方が、異なる理由から沈黙した背景に迫った。また、人種暴動検証委員会による報告書は、タルサ市に対して暴動被害者への賠償金支払いを勧告し、その結果生じた損害賠償請求とこれを巡って活発に行われた議論について考察した。

黒人自治体建設運動が、経済的向上を通してアメリカ人として認められるための闘いだっただとするなら、タルサ人種暴動における黒人の反撃は、アメリカ人であることを守り抜くための闘いであった。ブッカー・T・ワシントン¹は、黒人が努力し経済的自立を達成すれば、白人は感銘を受けて黒人への差別や迫害を止め、手を差し伸べるだろうと信じた。経済的成功により白人の尊敬を勝ち取るべきだという信念は、オクラホマの黒人たちにも

1 命名者ははっきりしないが、ブッカー・T・ワシントン(Booker T. Washington 1856-1915)が、街の賑わいぶりからこの呼び名を考案したと伝える説もある(Hannibal B. Johnson, *Acres of Aspiration-The All-Black Towns in Oklahoma-*, Eakin Press, 2007, 169; “Greenwood-The Black Wall Street of America,” *Historical Greenwood District- A Walking Tour-*, Greenwood Chamber of Commerce, 2013.)。

広く受け入れられ、目標となった。ところが、積み重ねた努力の末にもたらされたのは、白人の尊敬とは正反対の、コミュニティへのテロ行為であった。タルサはフロンティア文化を色濃く残し、自警団精神の蔓延する、リンチにも寛容な土地柄であった。犯罪者は法ではなく、民衆の暴力により迅速に処罰された。タルサの黒人は暴力と隣り合わせに生きており、リンチは身近な存在であった。法執行機関による保護を期待できなかった黒人たちは自衛の精神に目覚め、名誉とコミュニティを守る準備は整っていた。しかし、黒人たちは数で圧倒され、その抵抗も空しくグリーンウッドは白人暴徒の手に落ちた。タルサ人種暴動は、兵役、経済的発展、コミュニティの形成による人種意識の芽生えによって醸成された黒人としての自信と、祖国アメリカへの高まる期待を粉砕したのである。

暴動でコミュニティを焼き尽くされたにもかかわらず、黒人住民の多くがグリーンウッドに留まる道を選んだ。状況が厳しくなるたびに移住を繰り返して来た黒人たちが、なぜ今回ばかりは残虐な人種虐殺が行われて尚、タルサに留まる道を選択したのであろうか。彼らは長い闘いと度重なる移住を経て、遂にアメリカ人として堂々と生きる場所を見つけたのだ。とはいえ、タルサの和解への道は遠かった。タルサには無言の圧力がかかり、住民たちは半世紀に亘る沈黙を課され続けた。その爪痕は今尚深く、黒人住民たちの不正義に対する怒り、苦しみ、やるせなさ、そして不当に奪い去られたコミュニティの命と未来に対する償いがなされないことへの焦燥感は、絶えることなくグリーンウッドのそこそこに息づいているとする。

最後に今後の課題について記している。

論文審査の要旨

申請者 金城 智子氏の論文 「黒人自治体建設運動とタルサ人種暴動 ―オクラホマ黒人のアイデンティティを賭けた闘争―」は、政治学研究の中では アメリカ政治史、政治社会論、政治文化論、社会運動史、コミュニティ論などの広範な分野にまたがる研究として位置づけられる。

本研究の目的は 19 世紀半ばから 1920 年代の米・オクラホマ(Oklahoma)で、構造的・組織的な差別・排斥・暴力に直面した黒人たちが、どのように自衛し、闘ったかという黒人の「戦闘性」を地理的、歴史的、社会・文化的側面から明らかにすることにある。

アメリカ黒人の歴史については、これまでも多くの研究が蓄積されてきた。1964 年公民権法制定以後でも 50 年を経過し「黒人」大統領誕生に見られるように、一般白人たちの黒人に対する認識の変化を背景として、ようやく過去についても客観的資料にもとづく見直しの研究が進められるようになってきた。この研究もそのような研究環境の変化を反映している。

本研究の中軸をなすのは 2 つのテーマ、① 19 世紀後半から 20 世紀初頭の黒人自治体建設運動 (Black Town Movement)と、② 1921 年に オクラホマ州タルサ市 (Tulsa) で勃発したタルサ人種暴動 (Tulsa Race Riot of 1921) である。この二つのテーマは、これまでオクラホマ州内での研究に留まることが多く、個別の研究対象とされてきた。本論文は、そのような研究状況を覆して研究上の空白を埋める研究成果として、次のような点

を解明したことがあげられる。

- (1) 本論文において、金城氏はタルサの町のなかの町、グリーンウッド（Greenwood）を黒人自治体の一つと位置づけ、黒人自治体建設運動とタルサ人種暴動に共通する内的構造を明らかにした。
- (2) 黒人自治体建設は一種の社会運動であり、自律したコミュニティを形成することで社会的地位の向上を目指した、「アメリカ社会の一員になる」ための運動であり、他方、暴動における白人の攻撃に対する黒人の抵抗・反撃は、自身、家族、コミュニティを守るためだけでなく、アメリカ人であることを賭けた闘いでもあったことを実証した。
- (3) 本研究は、黒人自治体運動の歴史的背景、暴動の社会的要因、暴動の事実関係などについて、彼女自身の現地調査を踏まえて、先行研究や、報道記録・証言資料、市の調査報告書など、多様な史・資料の渉猟にもとづいて考察されており、その点で高く評価される。
- (4) 本研究は、わが国ではこの分野における唯一のモノグラフ的研究の成果といえるのであり、学界に小さくない一石を投じたものとして高く評価できる。
- (5) なお、本研究においては、事例研究としてオクラホマを中心に検討し、論証したため、オクラホマ以外の黒人自治体や、タルサ以外の暴動に潜む特徴を抽出できていない。今後、調査の範囲を広げ、同時期に各地で起きた黒人自治体建設や、他の人権暴動との比較研究が望まれるところである。さらに、研究の枠組みをさらに拡大し、アメリカの黒人自治体史と人種暴動史の全体像を浮き彫りにすることを目指してもらいたい。

金城 智子氏はこれまでも比較文化学会等において研究発表を行い、学会誌に論文が掲載されるなど、学会活動も活発に行っている。今後の更なる研究活動を期待したい。

審査結果の要旨

平成27年（2015年）2月3日午後1時（曜日）から3時まで久留米大学御井学舎第125教室において開催された口頭試問および審査委員会により、金城智子氏の論文が博士（政治学）の学位に値する研究であることを審査委員会は全員一致により確認した。